

西蔵寺廃寺発掘調査報告

2011（平成23）年12月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1. 本書は、三重県松阪市小阿坂町に所在する西藏寺廃寺の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の調査は、特定農業用管水路等特別対策事業一志南部1期地区に伴い、三重県教育委員会が三重県農水商工部から依頼を受けて実施した。なお、現地調査については、松阪農林商工環境事務所からの労務提供による。
3. 発掘調査の経費は、その一部を国庫補助金を得て三重県教育委員会が負担し、他は三重県農水商工部から経費の執行委任を受けた。
4. 調査の体制等は次の通りである。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター
調査研究Ⅰ課	技師 高松 雅文
調査期間	平成22年10月1日～10月15日
調査面積	西藏寺廃寺 325m ²
5. 調査にあたっては、地元自治会をはじめ、三重県農水商工部、松阪農林商工環境事務所、松阪市教育委員会、株式会社北村組の協力を得た。
6. 当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査研究Ⅰ課が行い、本書の執筆・編集は調査研究Ⅰ課技師高松が行った。
7. 当地は平面直角座標系第VI系に属しており、本書での方位は座標北を使用している。なお、座標値は世界測地系2000に基づいて表示している。
8. 当発掘調査の記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
9. 土層及び遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行の『新版標準土色帖（21版）』による。
10. 本書では、以下のように遺構の略記号表記をしている。

S R	: 旧河道	S K	: 土坑	S Z	: 性格不明遺構	Pit	: 柱穴・小穴
-----	-------	-----	------	-----	----------	-----	---------
11. 出土遺物のうち細片については、縄文土器は断面の左側に外面、古墳時代の土師器・須恵器は断面の右側に外面、左側に内面を展開して図化している。

目 次

I 前 言	1
1 調査に至る経過	
2 文化財保護法に関する手続き	
3 調査経過	
II 位置と環境	2
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
III 遺 構	5
1 概要	
2 基本層位	
3 遺構	
IV 遺 物	10
1 繩文・弥生時代の遺物	
2 古墳・飛鳥時代の遺物	
3 奈良・平安時代以降の遺物	
4 その他	
V 結 語	13
1 西藏寺の位置について	
2 まとめ	

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 遺跡地形図	4
第3図 調査区位置図	4
第4図 調査区平面図①	6
第5図 調査区平面図②	7
第6図 調査区土層断面図①	8
第7図 調査区土層断面図②	9
第8図 出土遺物実測図	11

表 目 次

第1表 出土遺物観察表	12
-------------------	----

写 真 目 次

写真図版1	15
西藏寺廃寺周辺地形（南東から）	
西藏寺廃寺調査区全景1（東から）	
写真図版2	16
西藏寺廃寺調査区全景2（北東から）	
西藏寺廃寺調査区全景3（西から）	
写真図版3	17
出土遺物	

I 前 言

1 調査に至る経過

西藏寺廃寺が発掘調査に至った契機は、特定農業用管水路等特別対策事業による。この事業は、これまでバイプラインとして使用されていた石綿セメント管を新たな管に取り替えるものである。

石綿（アスベスト）は天然に産出する纖維状鉱物で、熱や摩擦に強く、丈夫で変化しにくいという特性があり、様々な分野で使用されてきた。このような特性を活かして、は場整備やバイプラインでは、石綿繊維とセメントを原料に成型した農業用石綿セメント管が数多く敷設された。

しかし石綿は、粉じんの吸引によって呼吸器系の健康障害が発生するおそれがある。現在、石綿セメント管を通った水の水質は、特に問題とされないが、やがて迎える管の老朽化に備えて、石綿を含まない製品への計画的な更新が今後求められた。

こうした管の更新をふまえて、一志南部地区においても農業用石綿セメント管から新たなバイプラインへと取り替えることになった。

この事業の照会を受けた三重県埋蔵文化財センターでは、事業地内の遺跡分布調査を実施した。事業地には広見遺跡・出口遺跡・西藏寺廃寺の存在が知られていたが、遺物は遺跡の範囲を越えて広範囲に分布していることが判明した。このため、遺跡の保存について県農水商工部と協議を開始した。まず事業地内遺跡範囲1,200m²を対象に確認調査を実施することになり、当センターが平成22年1月14日～1月15日の期間で実施し、確認調査坑の一部からピット等の遺構を検出した。これを受け、当センターは西藏寺廃寺で200m²の範囲に保護措置が必要であると判断し、県農水商工部へ回答した。両者で協議が重ねられたが、どうしても保存困難な部分について発掘調査を実施し、記録保存することになった。

2 文化財保護法に関する手続き

文化財保護法（昭和25年法律第214号）および

三重県文化財保護条例（昭和32年条例第72号）にかかる諸手続は以下のとおりである。

○三重県埋蔵文化財保護条例第48条第1項

・平成22年1月5日付 松農環第4421号

三重県知事から三重県教育委員会教育長あて

「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」

○三重県埋蔵文化財保護条例第48条第2項

・平成22年1月8日付 教委第12-4129号

三重県教育委員会教育長から三重県知事あて

「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」

○文化財保護法第99条第1項

・平成22年10月8日付 教理第159号

三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて

「埋蔵文化財発掘調査の報告について」

○文化財保護法第100条第2項

・平成23年2月22日付 教委第12-4408号

三重県教育委員会教育長から松阪警察署長あて

「埋蔵文化財の発見について（通知）」

3 調査経過

調査対象地は、個人宅入口にあたることを考慮して調査区を東西に2分し、このうち西側から調査を実施し、終了次第、東側の調査を開始した。10月4日から西側を重機による表土除去、人力による包含層及び遺構掘削を開始した。掘削完了後直ちに写真撮影を行い、10月7日と8日の両日で実測を完了した。東半分は10月11日から同様の工程で行い、10月14日・15日に実測を完了した。遺構等の事情から最終的には325m²の範囲を発掘調査した。

なお、10月15日には近隣の松阪市立阿坂小学校6年生を対象に遺跡説明会を実施した。説明会後、調査を終了し、現地を引き渡した。また、平成23年1月25日に地元の歴史愛好会を対象に調査成果の報告会を現地で行った。

II 位置と環境

1 地理的環境

勢州は東の海から朝日が昇る。この朝日を拝するうえで絶好の地点のひとつが松阪市橋形山である。この橋形山の麓には扇状地が発達しており、西藏寺庵寺はこの扇状地の中央に位置する。このため当遺跡付近では水を得にくいか、下流では豊富な湧水がみられる。こうした地理的環境にある西藏寺庵寺周辺は、県内でも有数の遺跡密集地帯である。以下では、当遺跡周辺の主要な遺跡を時代ごとにとりあげて歴史的環境を概観しておく。

2 歴史的環境

西藏寺庵寺（1）は行政的には松阪市小阿坂町字向川に所在し、西に橋形山を望む扇状地に位置する。当遺跡の周辺では、原始・古代から人々が生活を営んでいたようで、これまでの発掘調査からその一端がうかがえる。

（1）縄文・弥生時代

縄文時代の遺跡として、広大な範囲を占める伊勢寺遺跡^①（24）をあげることができる。伊勢寺遺跡では縄文時代後期初頭から前半にかけての土器が出土している。弥生時代になると、田村西瀬古遺跡^②（5）において方形周溝墓が確認されている。この他、上野1号墓^③（4）も当地の代表的な弥生時代墳墓である。

（2）古墳時代

古墳時代前期には、墳長45mの前方後方墳の筒野古墳、墳長82mの前方後方墳の向山古墳（3）、墳長47mの前方後方墳の鈴山古墳（2）等が築かれている^④。これらの古墳は、旧一志郡域を主要な基盤としていたと想定される。一方で、二重口縁壇などが多数出土した深長古墳^⑤（27）、中期には宝塚1号墳のほか、八重田古墳群^⑥（33）など旧飯高郡域において大規模な古墳が造営されている。西藏寺庵寺周辺には大規模な古墳が少なく、空白地帯といえる。後期になると、瑞巖寺古墳群^⑦（30）などの横穴式石室を伴う群集墳が旧飯高郡域を中心に確認さ

れている。

（3）奈良・平安時代

古代における行政区画では、西藏寺庵寺は一志郡に属する。地形的に境界は不明確ながら、美濃田以南が飯高郡とされる。古代においては飯高郡域において伊勢寺遺跡（24）と伊勢寺庵寺^⑧（25）等の当地における代表的な遺跡が営まれている。伊勢寺庵寺の創建は白鳳期にさかのぼり、三彩陶器が出土している。類品として川原寺等で出土している縄緋波文博や京都府馬場南遺跡の彩釉山水陶器があげられる。その用途は諸説あるが^⑨、高い文化がこの地にもたらされたことがうかがえよう。

また、当地には式内社の阿射加神社（B）が小阿坂と大阿坂の2ヶ所に所在する。その関係は諸説あるが、いずれにしても西藏寺は小阿坂の阿射加神社に付属した別当寺とされる。したがって、阿射加神社との関わりのなかで西藏寺の展開を理解する必要がある。

（4）鎌倉・室町時代

古代から中世においては、当地に多くの荘園が形成された。当地に開わる荘園として、阿射賀御厨があげられる^⑩。御厨は、伊勢神宮に貢納物を納める神領をさし、所領の形態のうえでは荘園と同様といえる。阿射賀御厨は外宮領、領家は冷泉家で、康平3年（1060）が初出であることから、立花は11世紀にさかのぼる。この御厨は大・小に分かれたようで、建保元年（1213）に藤原定家が小阿射賀御厨地頭渋谷左衛門尉の新儀非法を幕府に訴えている。その後、小阿射賀御厨は14世紀後半まで存続したようだ。西藏寺蔵大般若経の永和元年（1375）・永和8年の奥書にその名がみえる。この他、寛平元年（889）以前に立花された曾祢莊が宮ノ腰遺跡^⑪（21）周辺に比定されている。

室町時代になると、当地域は伊勢国司北畠氏の支配下にあった。橋形山頂には阿坂城（8）、麓には北畠氏の菩提寺にあたる淨眼寺（A）がある。阿坂城は、白米城とも称され、応永22年（1415）の足利幕府軍に兵糧攻めにされて水を絶たれた時に、馬の背

中に白米を流して、あたかも水があるように見せかけて、幕府軍を撃退したという逸話が残されている。この阿坂城は永禄12年（1569）、織田信長による伊勢国への侵攻に際して落城している。なお松原（15）と高城（7）は阿坂城の出城だったと考えられる。

（5）江戸時代

近世においては、当地域は紀州藩に属する。こうした関係もあって、もともと敏太神社（C）の本地仏で、現在は真楽寺にある美濃田大仏が紀州粉河の鉢物師によって造立された。

以上のように彩り豊かな歴史をもつ当地域であるが、西蔵寺廃寺を考えるうえで特に阿射加神社との関係が重要となる。この点は結語で詳述したい。

〔註〕

- ① 三重県教育委員会『昭和63年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第2分冊 1989
- ② 三重県埋蔵文化財センター『田村西瀬古遺跡』1999
- ③ 松阪市『續野史』考古編 2006
- ④ 註3文献
- ⑤ 三重県教育委員会『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』I 1989
- ⑥ 松阪市史編さん委員会『松阪市史』第2巻資料篇考古 1978
- ⑦ 註5文献
- ⑧ 三重県埋蔵文化財センター『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』1990
- ⑨ 上原直人「神雄寺の彩釉山水陶器と灌仏会」、『京都府埋蔵文化財論集』第6集（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2010
- ⑩ 稲本紀昭『伊勢国』『講座日本歴史』6 吉川弘文館 1993
- ⑪ 三重県埋蔵文化財センター『宮ノ郷遺跡発掘調査報告』II 1999

- 遺跡名**
1. 西瀬古廃寺
 2. 錦山古墳
 3. 向山古墳
 4. 上野1号墓
 5. 田村西瀬古遺跡
 6. 小野遺跡
 7. 高城跡
 8. 阿坂城跡
 9. 市屋山古墳
 10. 大阿坂大石臼遺跡
 11. 広見遺跡
 12. 中野遺跡
 13. 阿坂3号墳
 14. 下山見廻跡
 15. 积城跡
 16. 新田遺跡
 17. 大瀬古跡
 18. 出口遺跡
 19. 大蓮寺跡
 20. 上ノ庄古出遺跡
 21. 上ノ庄ノ郷遺跡
 22. 宮ノ沖古跡
 23. 美濃田古墳群
 24. 伊勢寺廃寺
 25. 伊勢寺廃寺
 26. 前沖遺跡
 27. 深長古墳
 28. 曲遺跡
 29. 堀内田古墳群
 30. 球藏寺古墳群
 31. 天神山古墳群
 32. 平林古墳群
 33. 八重田古墳群

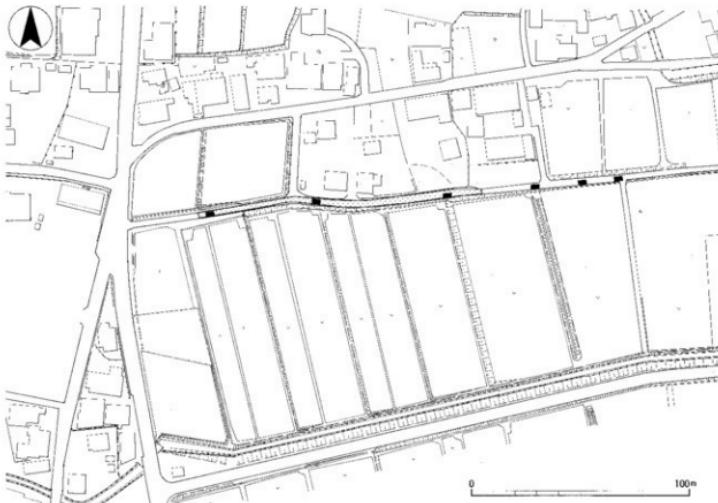
- 寺社**
- A-淨眼寺
 - B-阿射加神社
 - C-祇園神社



第1図 遺跡位置図 (1:50,000)【国土地理院「大仰」「大河内」1:25,000より作成】



第2図 遺跡地形図 (1:5,000)



第3図 調査区位置図 (1:2,000) (■は試掘坑)

III 遺構

1 概要

調査は市道を対象地としており、総長130m、幅3mである。道路の折れ曲がりを考慮して、調査区をA-B間、B-C間、C-D間に3分割し、それぞれ主軸を設定した。A-B間の距離は59.558m、B-C間は29.274m、C-D間は42.0mである。この主軸に直交するように土壟断面図を作成し、平面図・断面図の対応を図った。

2 基本層位

基本層位として、アスファルトとそれに伴う碎石の下には整地土（第3・4層）があり、現代の遺物を伴う。その下には昭和30～40年代と考えられるコンクリートブロックによる擁壁が検出された。さらに擁壁の下から石縄管を埋設した溝（第7層）が検出された。これによって石縄管を埋設後、擁壁で丘陵部への補強がなされ、さらには場整備が行われたことが判明した。

これら昭和時代の事業による影響が及んでいない部分は限られるが、第19～24層より下層は、ほぼ平安時代以前の遺物に限定できる。地山（第30層）は黄褐色系の色調を呈し、砂粒の粗い点が特徴である。砂粒の特徴は層状地に立地していることが関係しているのだろう。

3 遺構

（1）旧河道

S R 3 調査区西端のg 1～f 4グリッドで検出した。幅8m以上の南流する旧河道で、中央に島状の高まりが確認された。第9層において近世の磁器が含まれていたことから、比較的新しい時期まで河道として機能していたことが分かる。

S R 4 調査区中央のd 19～d 20グリッドで検出した。北側では幅を減じているが、南側では幅5mを測る。出土遺物はほとんど認められなかった。

S R 5・6 と類似した埋土・堆積状況から、比較的古い時期に埋没したと考えられる。

S R 5・6 調査区のやや東側のc 24～b 28グリッドで検出した。S R 5は幅6m、S R 6は6.5mで、地形から判断して南流していたと考えられる。出土遺物はほとんど認められなかつた。埋土からS R 5・6は同じ契機によって埋没したと考えられる。その時期を限定することは難しいが、埋土より上層から土師器の甕が出土していることから、比較的古い時期に埋没したと考えられる。

S R 8 調査区東端のa 32・a 33グリッドで検出した。幅は5m以上である。明確な出土品を伴わなかったため時期は不明である。

以上の状況から、東の旧河道は比較的早い段階、古代から中世には埋没したと考えられる。一方で西端のS R 3は、近世あるいは近・現代まで機能していたと考えられる。これにより、層状地における流路は東側で展開していたが、その後西へ移動し、さらに現流の中野川へと変遷したと考えられる。

（2）土坑

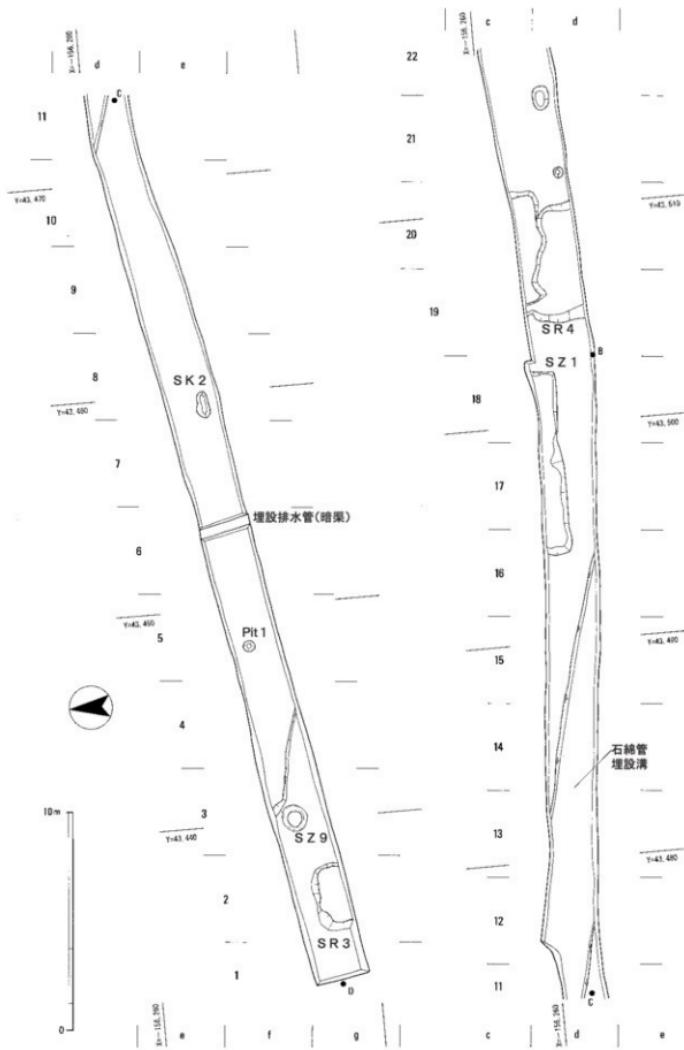
S K 2 調査区西側のe 8グリッドで検出した。長径1.2m、深さ15cmの大きさである。平安時代とみられる土師器の細片が出土した。

（3）その他

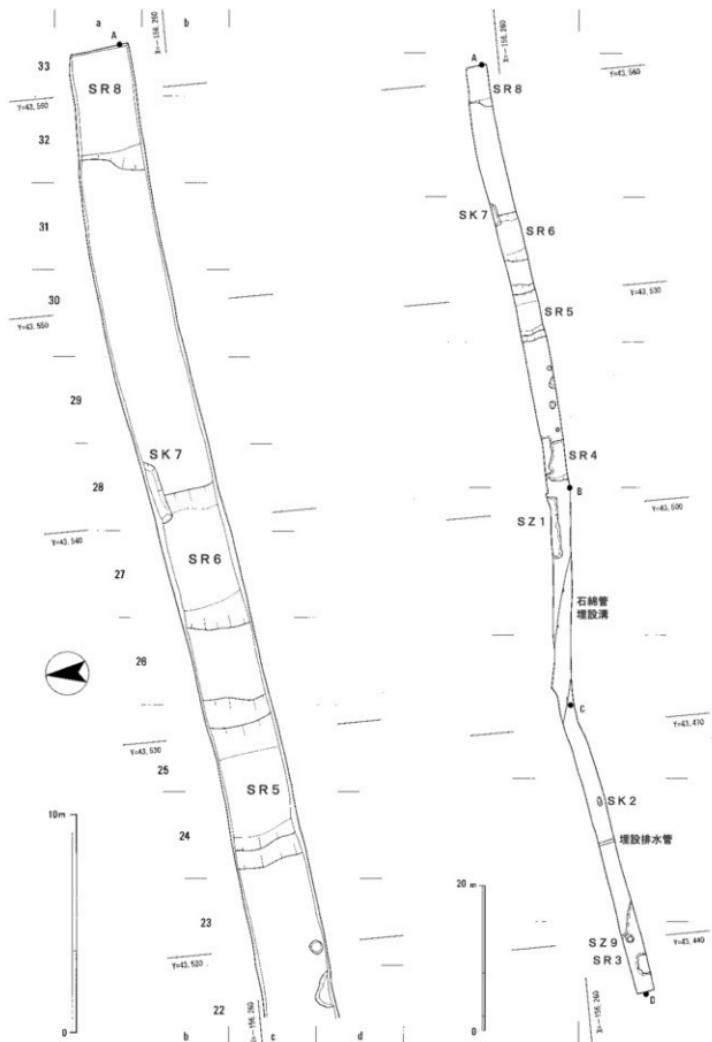
S Z 1 調査区中央、d 16～d 18グリッドにおいて落ち込みを検出した。当初、窓穴住居の可能性を考慮したが、堆積状況や出土品から、旧河道に関連する落ち込みと判断した。東西方向の幅は8mである。使用痕有削片・須恵器・土師器の甕などが出土した。埋没時期は古代ととらえることができる。

S Z 9 調査区西側、f 3グリッドでS R 3と重なるような状況で検出した。直径1.2m、側壁の厚さ20cmである。出土品は認められなかつた。S Z 9は田畠に伴う肥溜めと考えられる。なお、肥溜めは京都などの都市近郊を除けば江戸時代から見られるという指摘がある^①。この点を考慮すれば、S Z 9は江戸時代以降と考えられる。

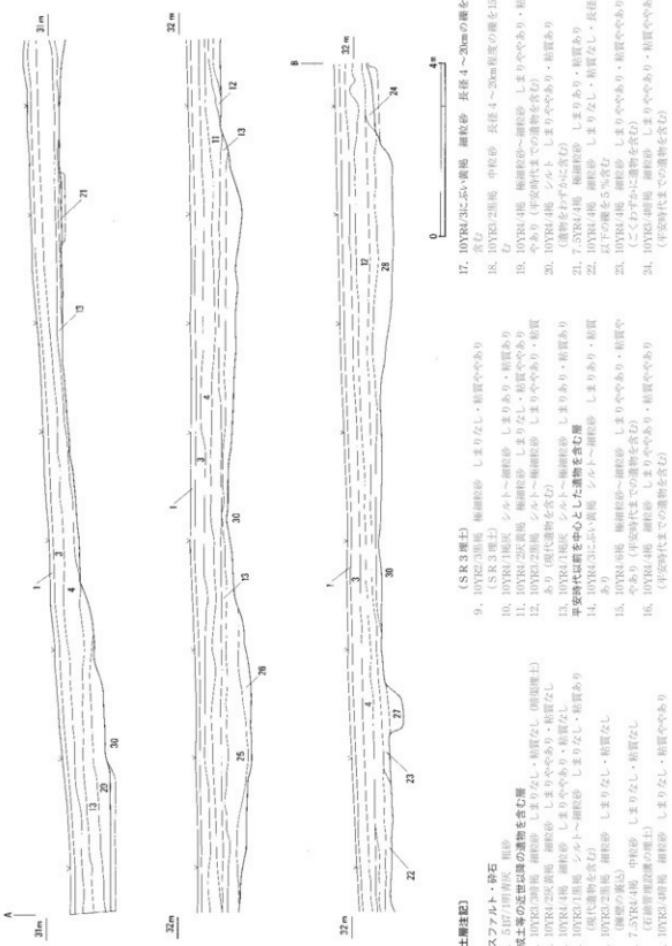
Pit 1 調査区東側f 5グリッドにおいて検出した。直径50cmの大きさである。奈良・平安時代と考えられる土師器の甕がわずかに出土した。



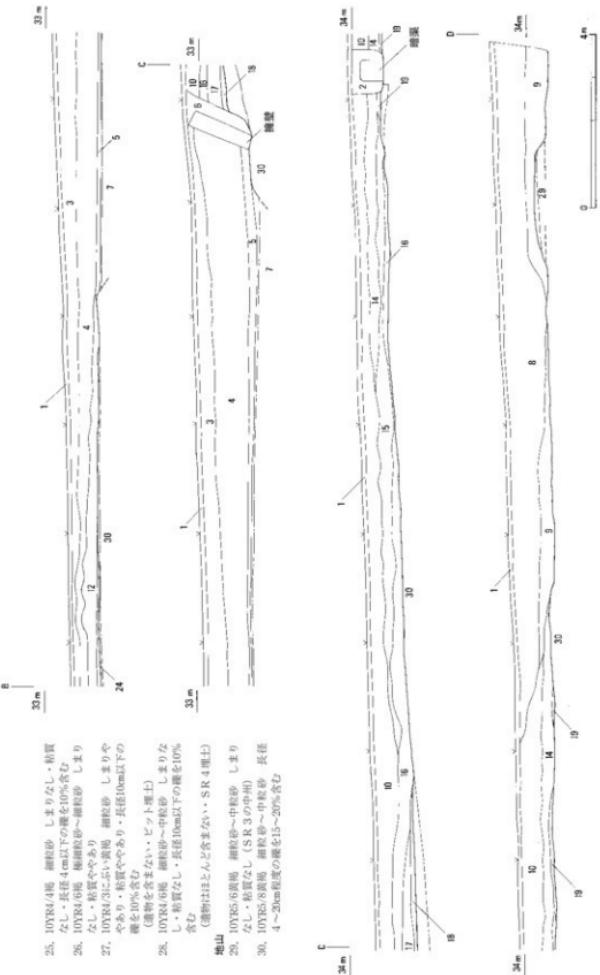
第4図 調査区平面図① (1 : 200)



第5図 調査区平面図2 (1:200) [右図は調査区全体図 (1:600)]



第6図 調査区土層断面図① (1 : 100)



第7図 調査区土層断面図2(1:100)

IV 遺 物

遺物量は整理箱にして2箱と少ない。また小片が多く、時期決定に制約をうける。

1 繩文・弥生時代の遺物

縩文時代の遺物として使用痕有剥片(1)、縩文土器(2・3)が出土した。

1は使用痕を有する剥片で、大きさは横幅6.0cm、縦幅3.0cm、厚さ1.0cmである。図化した右面上部からの打撃によって石核から分離し、剥片となつたと考えられる。外面の一部には縪表をとどめる。刃部相当部には使用痕と考えられる小さな剝離が観察できる。原材料は大阪府と奈良県を画する二上山産のサヌカイトと考えられる。風化の進行度から時期は縩文時代以降とみなしておきたい。

2は図化した外面の上部に縩文が認められ、下部には沈線が施される。時期は縩文時代後期にあてておきたい。3は図化した外面に巻貝によると思われる条痕が認められる。特徴が限られているものの、縩文時代後期頃とみなしておきたい。

弥生時代に属すると考えられる遺物として土器(4)を1点確認した。4は壺と考えられるが、具体的な器種は不明である。復元口径12.1cm、残存高8.3cmである。外面には縦方向のハケ、内面は頸部より上に横方向のナデが施される。頸部と体部の境は明瞭な屈曲がみられる。時期をとらえる特徴乏しいものの、弥生時代後期頃としておきたい。

2 古墳・飛鳥時代の遺物

古墳時代の遺物として台付甕(5)、飛鳥時代の須恵器(6~10)、土師器杯(12)等を確認した。

5は台付甕の頸部から体部と考えられる。外面は横方向のハケのもの、縦方向のハケを施したと考えられる。なお、ハケの粗さなどからS字彫^②のD類ないしはそれ以降の可能性があり、この場合、古墳時代中期頃とみなせる。

6は杯身である。大きさは復元口径10.8cm、最大径12.2cm、残存高3.0cmである。口縁部は短く、内傾しながら立ち上がり、端部はまるくおさめる。

体部外面には下半に回転ヘラケズリが施される。田辺昭三氏による須恵器編年によらし合わせると^③、口径が12cm未満であることからTK209型式あるいはTK217型式古相の範疇でとらえられるだろう。

7は復元口径9.2cm、最大径10.8cm、残存高2.7cmである。口縁部は短く内傾しながら立ち上がり、端部をまるくおさめる。体部外面には回転ナデが施される。体部下半にはヘラギリの後、回転ヘラケズリが通常施されるが、7では施されずに回転ナデによって調整されている。口径が10cm未満であること、回転ヘラケズリが施されていないことからTK217型式新相といえるだろう^④。

8は杯身か杯蓋が不明だが、杯身として報告する。外面はヘラギリの後、回転ヘラケズリを行わず、わずかなナデで調整を終える。ヘラギリ未調整は、TK217型式古相からみられるとの指摘をふまえて、本資料をTK217型式とみなしておく。9も杯身か杯蓋が不明だが、杯身として報告する。外面はヘラギリの後、調整が施されない、ヘラギリ未調整の特徴から、本資料をTK217型式とみなしておく。

10は高杯の杯部と考えられる。脚部との接合部分の径などから、長脚化したのちに小型化が進んだ時期。すなわちTK217型式とみなせる。

11は須恵器の甕と考えられる。外面には格子目風のタタキが観察できる。これは、もともと平行文のタタキだったが、原体がすり減ったことによって木目が浮き出た結果と考えられる。内面には同心円文の當て具痕が明瞭に観察できる。特徴が限られているため、時期の限定は控えておく。

12は土師器杯で、大きさは復元口径12.2cm、高さ3.5cmである。口縁部は短くまっすぐ立ち上がり、不明瞭ながら内傾する端面をもつ。外面にはユビオサエがめぐり、底部には葉脈痕が確認できる。内面には板状工具によるオサエが認められる。全体的な器形から古墳時代後期から飛鳥時代の時期とみなしておきたい。

3 奈良・平安時代以降の遺物

奈良・平安時代以降の遺物として、暗文の施された皿（13）、杯（15）、高杯（19）、甕（21～23）等の土器があげられる。

13は暗文が施された皿であるが、表面の遺存状態が良好ではないため、暗文がほとんど確認できない。復元口径18.2cm、器高2.3cmを測る。体部から口縁部への屈曲部に暗文が施されていた。斎宮跡の土器編年の第1期第2～3段階に相当すると考えられる^⑤。

15は、体部から外上方に口縁部がのびる。口縁部中ほどで外反気味に開き、端部は内面にナデを施すことで内湾するように仕上げる。斎宮跡第Ⅱ期第1段階、すなわち9世紀後半ごろととらえておきたい。

19は高杯の脚部である。脚部は体部との屈曲部において復元径5.0cmを測る。外面には面取り風の調整が粗くなる。律令期の高杯と考えられる。

21は甕で、復元口径12.0cm、残存高5.0cmの大き

さである。口縁は外反し、端部をまるくおさめる。外面は縱方向のハケが施される。

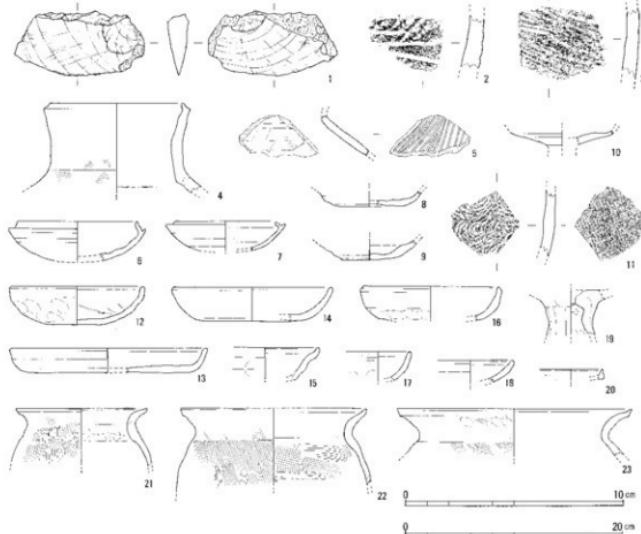
22は甕の口縁部から体部にあたる。復元口径は17.0cm、残存高7.1cmである。口縁部は、外反しながら短く立ち上がり、端部をわずかにつまみ上げる。外面は体部に縱方向のハケが施される。内面は横方向のハケが頬部より下において認められる。

23は長胴甕の口縁部から体部にあたる。復元口径21.6cm、残存高4.1cmである。口縁部は、外反しながら短く立ち上がり、端部をわずかにつまみ上げる。外面は成形時のユビオサエがわずかに認められ、その上に縱方向のハケが施される。

20は土器鉢である。伊藤裕偉氏による編年の第4段階に相当し^⑥、曆年代は16世紀代と考えられる。

4 その他

その他、図化には至らなかったが、灰釉陶器1点、常滑焼と推定される焼片1点を確認した。



第8図 出土遺物実測図（1～3は1:2、4～23は1:4）

No.	登録番号	種別・器種	遺構	出土層位	法量 (cm) 口径 () 器高 ()	調整 (技法) の特徴	胎土	焼成	色調	残存度
1	002-04	使用痕 有剥片	SZ1	d17	— —	— —	—	—	—	—
2	003-02	縄文土器	—	d17	— —	外: 沈線、繩文 内: オサエ	粗	良好	外: 7.5YR6/4にぶい橙 内: 10YR6/2灰黄褐	—
3	003-03	縄文土器	—	d17	— —	外: 卷貝による条痕 内: ナデ	粗	良好	外: 10YR6/2灰黄褐 内: 10YR5/1灰灰	—
4	002-03	弥生土器 壺	—	b28	(12.1) (8.3)	外: ハケ 内: ナデ	密	良好	外: 2.5Y8/2灰白 内: 2.5Y8/2灰白	2/12
5	003-01	土師器 台付甕	SZ1	d17	— —	外: ハケ 内: ナデ、ハケ	密	良好	外: 10YR7/4にぶい黄橙 内: 10YR7/4にぶい黄橙	—
6	001-02	須恵器 杯身	—	f5	(10.8) (3.0)	内: 回転ナデ	密	良好	外: 5Y6/1灰 内: 5Y6/1灰	2/12
7	001-01	須恵器 杯身	—	f5	(9.2) (2.7)	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	密	良好	外: 5Y6/1灰 内: 5Y6/1灰	3/12
8	005-03	須恵器 杯身	—	d17	— —	外: 回転ナデ、ヘラギリ後 内: 回転ナデ、底部に一方 向ナデ	密	良好	外: N6/灰 内: 5Y7/1灰白	—
9	001-03	須恵器 杯身	SZ1	d16	— —	外: ヘラギリ未調整、回転 ナデ 内: 回転ナデ、底部に一方 向ナデ	密	良好	外: N4/灰 内: N4/灰	—
10	005-02	須恵器 高杯	—	d17	— —	外: 回転ペラケズリ、回転 ナデ 内: 回転ナデ、底部に一方 向ナデ	密	良好	外: 7.5Y6/1灰 内: 同上	—
11	005-04	須恵器 甕	—	d16	— —	外: タタキ (格子目風) 内: 当て具痕 (同心円文)	密	良好	外: 5Y5/1灰 内: N7/灰白	—
12	001-06	土師器 杯	—	d17	12.2 (14.6) 3.5	外: ナデ、オサエ、底部に 葉脈痕 内: 板状工具によるオサエ、 ナデ	やや 密	良好	外: 2.5YR6/8橙 内: 10YR7/4にぶい黄橙	6/12
13	001-05	土師器 甕	—	f5	(18.2) 2.3	内: ナデ、暗文	密	良好	外: 5YR6/8橙 内: 5YR6/8橙	1/12
14	004-01	土師器 杯	—	d11	(14.6) 3.1	外: ナデ 内: ナデ	密	良好	外: 7.5YR6/6橙 内: 外: 同様	3/12
15	004-06	土師器 甕	SR3	g3	— —	外: ナデ、オサエ 内: ナデ	密	良好	外: 2.5YR6/6橙 内: 同上	—
16	004-10	土師器 杯	—	f5	(12.6) (3.2)	外: ヨコナデ、オサエ 内: ヨコナデ	やや 密	良好	外: 7.5YR7/4にぶい橙 内: 5YR6/6橙	1/12
17	004-05	土師器 杯	—	—	— —	外: オサエ、ハケ 内: ナデ	密	不良	外: 10YR8/3浅黄褐 内: 同上	—
18	004-09	土師器 甕	—	e9	— —	外: ナデ 内: ナデ	やや 密	良好	外: 5YR6/6橙 内: 同上	—
19	004-02	土師器 高杯	—	f5	— —	外: ナデ。粗い面取り風の ナデ 内: ハケ	密	不良	外: 10YR8/2灰白 内: 10YR8/2灰白	9/12
20	005-01	土師器 甕	—	—	— —	外: ナデ 内: ナデ	密	良好	外: 7.5YR7/3にぶい橙 内: 同上	—
21	004-03	土師器 甕	—	c26	(12.0) (5.2)	外: タテハケ 内: ナデ	密	良好	外: 7.5YR5/2灰褐 内: 7.5YR6/3にぶい橙	1/12
22	002-01	土師器 甕	—	b27	(17.0) (7.1)	外: タテハケ、口縁にナデ 内: ハケ	密	良好	外: 10YR7/3にぶい黄橙 内: 10YR7/4にぶい黄橙	4/12
23	002-02	土師器 長胴甕	—	d16	(21.6) (4.1)	外: タテハケ、口縁にナデ 内: ナデ	密	良好	外: 10YR7/4にぶい黄橙 内: 10YR8/3浅黄褐	2/12

口径の () は復元口径、器高の () は残存高をさす

第1表 出土遺物観察表

V 結 語

今回の調査では、旧河道・土坑・ピットの他、肥溜めを確認した。旧河道に伴う遺物は明確ではなかったが、状況から西端のS Z 3が最も新しいと推測される。

肥溜めのS Z 9については、周辺の状況などから田畠に伴うと考えられる。宇野隆夫氏の研究によれば、田畠遺構に付属する肥溜めは戦国期以前にはほとんど存在しないという⁷。本遺跡の肥溜めは、厳密な時期を決定するまでは至らなかったものの、当地における農村のあり方・農業史を考えるうえで貴重な事例となり得るだろう。

また、S Z 9の存在から、調査区周囲には田畠が広がっていたと考えられる。この点は、西藏寺の寺城を考える手がかりとなる。

出土品については、繩文時代と考えられる使用痕有剥片・繩文土器、古墳時代の台付甕、古代の暗文が施された土師器・長胴甕など各時代の遺物を確認した。古代までの遺物が比較的多く、中・近世の遺物は少ない傾向を指摘できる。

1 西藏寺の位置について

西藏寺庵寺の遺跡登録は昭和37年（1962）に週る。登録では畑中に2個の礎石が現存することを重視しており、当地で著名だった西藏寺の跡と判断したようである。西藏寺は、式内社阿射加神社の別当寺にあたる。江戸時代までは毎年2月6日の神社の祭りにおいて大般若経を宮中に転読していたが、その後、西藏寺で行うようになったという⁸。本尊は、平安時代後期の作とされる木造阿弥陀如来坐像の優品である。これらの点から西藏寺が名利だったことがわかる。しかしこの西藏寺は明治初年に無禮無住のため廃寺となる。これに伴って南北朝時代の1374～1379年に写經された大般若経は木曾岬町清雲院にわたり、本尊も松阪市小阿坂町光徳寺（山見觀音堂）に移された。

大般若経や本尊から西藏寺は大きな寺だったと考えられる。その一方で、本調査においてS Z 9（肥溜め）が検出されるなど、田畠が広がる地形が想定

された。したがって、西藏寺の位置について再検討する必要が生じた。そこで、まず根拠となった礎石についてみてみよう。礎石は現在も個人宅の敷地に現存し、ひとつは凸形、もうひとつは凹形を呈する。

この礎石を調べると、嘉永4年（1851）に刊行された『勢国見聞集』に「二つ石」としてみえる⁹。『勢国見聞集』は伊勢寺町荒井、荒井勘之丞が完成させた旅行案内本で、現在のガイドブックに相当する。この石の説明として、「田の中に数間を隔ててあり。塔の苔石の類、凸凹の形なり。此所に往古蓮光寺と云精舍ありし由」とある。

すなわち『勢国見聞集』では礎石を蓮光寺の跡としているのである。さらに西藏寺は明治初年に廃寺となったとされるが、それ以前に刊行された『勢国見聞集』において礎石の記述がみられるのである。この2点から西藏寺庵寺として登録されている地点は、蓮光寺跡として登録すべきだったといえる。

なお、本調査区の東200m付近に集会所があり、建設時に大量の瓦と五輪塔が出土したという。この地元住民の証言を考慮すれば、集会所付近を西藏寺庵寺に想定するほうが適切といえよう。

以上から、この度の発掘調査地は『勢国見聞集』のいう「二つ石」のある場所といえる。発掘調査において瓦の出土をみなかったこと、古代の遺物を中心とした出土品だったことを考慮しながら、二石について詳細な観察・分析を進めて、遺跡の性格を探ることが今後求められよう。

2まとめ

まとめとして、本遺跡では古代を中心に繩文時代以降の遺物が確認できたことが大きな成果といえる。地形や調査区では遺構に伴う遺物がわずかだったこと等から、遺跡の中心は調査区北側の微高地で、遺物は本調査区に流出してきたと推察される。今後この微高地において発掘調査が行われることで、本遺跡の性格が明確になるだろう。

〔註〕

- ① 宇野隆夫『莊園の考古学』青木書店 2001
- ② (財) 愛知県埋蔵文化財センター『廻間遺跡』1990
- ③ 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
1966、田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- ④ 菊田哲郎「畿内の初期瓦生産と工人の動向」『史林』
第69巻第3号 史学研究会 1986、菊田哲郎・奥西
藤和「八代宮ノ谷窯跡出土の須恵器」『鬼神谷窯跡発
掘調査報告』竹野町教育委員会 1990、山田邦和
『須恵器生産の研究』学生社 1998
- ⑤ 斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』2001
- ⑥ 伊藤裕倫「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」『研
究紀要』第1号 三重県埋蔵文化財センター 1992
- ⑦ 註①文献
- ⑧ 松阪市史編さん委員会『松阪市史』第3巻・第6巻・
第8巻・別巻1 松阪市 1979~1983
- ⑨ 註⑧文献

写真図版 1



西蔵寺廃寺周辺地形（南東から）



西蔵寺廃寺調査区全景 1（東から）

写真図版 2



西蔵寺廃寺調査区全景 2（北東から）



西蔵寺廃寺調査区全景 3（西から）

写真図版 3



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	さいぞうじはいじはくつちょうさほうこく						
書名	西蔵寺廃寺発掘調査報告						
副書名							
巻次							
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	326						
編著者名	高松雅文						
編集機関	三重県埋蔵文化財センター						
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732						
発行年月日	2011年12月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町	北緯 遺跡番号	東経 °'."	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
さいぞうじ はいじ 西蔵寺廃寺	みえけんまつさかし こあさからよう 三重県松阪市小阿坂町	204	a 10	34° 35' 14"	136° 28' 38"	2010.10.01 ~ 2010.10.15	325 特定農業用 管水路等特 別対策事業 一志南部1 期地区
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
西蔵寺廃寺	社寺跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 古代 中世 近世以降	土坑 肥溜め	使用痕有剥片、縄文土器 弥生土器 台付甕、須恵器、土師器 土師器、長胴甕 土師器			
要約	梯形山から派生する扇状地に立地する。古代の遺物を中心に縄文時代にさかのぼる遺物が出土したが、明確な遺構は検出されなかった。						

三重県埋蔵文化財調査報告 3-2-6

西蔵寺廃寺発掘調査報告

2011年12月19日

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 光出版印刷株式会社